

内 容

現代文明と精神生活

得能文

■トルストイ(わかな) ■北邊の古謡(小倉) ■墨西古(須田)

シヨツベン ハウエルゴラスキ

ンの女子問題についての所感

千葉安良

木の芽

尾上柴舟

春風歌(竹田) ■白い孔雀(みなみ) ■移轉の日(ひさは)

新橋より新橋まで (T.S)

■彙報 ■研究

惟れ大正三年五月二十四日

昭憲皇太后靈輜將さに桃山陵に遷座し給はんとす

至尊親しく祖奠に臨み 躬ら宵載を瞻給ふ 率土兆民歎歎哀恫し 環球列

國惋歎弔哭す 日月爲に暗く 山川光を失ふ 東京女子高等師範學校長

臣中川謙二郎 師生を率同し 堂延を掃潔し 虔みて遙拜の儀を擧げ 恭し

く奉悼の辭を獻ず 辭に曰く

伏して以みるに

皇太后性本溫粹 德維れ聖善 茂質内に含み 英華外に發す 柔順の氣

春日和暢し 貞堅の操 秋霜肅栗す

先帝の盛徳大業は天地に軒り 八紘に覃ぶ

内助の功焉に與る

今上の深仁厚澤は上下に洽く 四海に被る 慈訓の力多きに居る 民生救

恤の業多く 令旨を待ちて舉り 女子教育の基寔に 惠衷に頼りて立つ
姜后或は比ぶ可く 長孫何ぞ道ふに足らん 我校の創設せらるゝや
首として内帑を發き以て費用を飲け新築の竣成するや載ち 軒駕を拄け
而して榮輝を垂れ 曾て 睿艸を賚ひ 數々 德音を降し給ふ 星霜四
十稔 臨御十一次 慈仁の澤は滄溟よりも深く 勸奨の恩は峻嶽よりも
高し 女校の鬱興往古に邁ぎ 才媛の輩出來今に盛なるは 懿德に頼る
に非ずんば 惡ぞ能く茲に臻らんや 既に芳澤の餘り有るを佩し 益々
寶算の疆り無きを祝しまつりき 寧ぞ料らん閔天弔せず 上仙攀づる
なからんとは 玉趾の跡を九重に絶ち給へるを嘆き 瓊姿の再仰に由な
きを慨む 翠辮を瞻れば 肝腸斷絶し 蒼穹を望めば涕泗滂沱たり
血涙を毫端に濡し 丹悃を楮表に馳す 嗚呼哀いかな

新大正三年五月二十四日

現代文明と精神生活（講演）

得能文

閣下及諸君。今日私がこの席に出て一場の御話をするのは私の光榮とする處である。就ては何か實のある御話をする筈であるが、大した御話も出來ない、この點は誠に汗顔の至である。先日垣内先生に申上て置いた題目は甚だ大袈裟で、何か非常に大きな事の様であるが、實は題丈が大きいので内容は至つて貧弱であるから其御積りで御聞き取りを願ひたい。

先づ第一に文明と云ふ事であるが、文明とは一體如何なる事であるかと云ふと、天然自然の世界に對して人間が何か力を加へる、之が即ち文明である。我々が日常用ふるものに我々の力の加へてないものは一つもない。例へば一杯の水も、それを我々が飲む迄には中々多くの人手がかかる、堀井、水道、汲む器、持つて來る器、飲む器、凡て我々の力で何等かの形を與へて、そして其用に供するのである。又日常の食品にしてもさうであつて、一粒の米もそれにかけて手数は莫大なものである。衣服も住居も凡て我々の力が加はつて初めて用ゐ得らるゝものである、即ち我々が人間の力で天然物に何等かの形を與へて生活の内容とするのである。而して我々の生活を形作る方法には時代によつて其特質がある。ギリシヤの如きは藝術的に形作つた故、